

『道草』『半日』の家庭 —〈強い妻〉と〈強い女〉—

芳 野 祥 子

本稿では、『道草』『半日』における妻、家庭を論じていく。

研究史から触れると、『道草』においては、倫理的優越者である健三の日常生活の苦悩を論じたものが多く、家族に焦点が当てられ研究されだしたのは、ここ10年程である。『半日』においても、発表当初は、核家族というよりも、血族や家父長制家族という面から論じられており、核家族小説として研究されたのは、ごく最近のことである。いずれも、夫を中心にした研究がほとんどである。本稿では、漱石、鷗外の妻である、夏目鏡子、森しげが書いた自叙伝『漱石の思い出』『波瀾』とを照らし合わせて、妻を中心に、家庭を考えていく。

明治3・40年頃は、産業化や『家庭雑誌』の創刊などによって、新しい家族観が登場し、伝統家族が解体されていく過渡期にあたる。そのような激動の時代の中でも、妻は、明治民法により、一貫して無能力と規定され続けた。妻は、法的に弱かった。しかし、『道草』『半日』には、法的弱さを裏切る、妻の側面が描かれていると私は思う。変容する家族像の中で、夫と妻の関係も実質的に変わりつつあったのではないだろうか。

『道草』の細君は、強い意志を持ち、家計や岳父のうしろだてという手堅い武器を持つことによって、生活の中で具体的に力をつけ、〈強い妻〉となった。また、『半日』の奥さんは、妻の役目を母君に奪われてしまったがゆえ、〈強い妻〉になる事ができなかったが、美貌という女の性的魅力を武器に〈強い女〉になり得た。彼女たちは、確かに、いざとなるとどうなるのか分からない、と

いう弱さを抱えていた。しかし、だからこそ、法的でないところに根拠を創りだし、「しぶとい」強さを手に入れたのである。

〈強い妻〉〈強い女〉であった彼女たちは、時として、家庭に「緊張」や「不快」をもたらした。つまり、彼女たちこそが、家庭を〈闘いの場〉に仕上げてしまったのである。ゆえに、彼女たちは、実際の家庭の中において、決して「無能力」ではなく、むしろ、彼女たちこそが、家庭の主役であり、家庭を支配したとすら言える。

変容する家族像の中、理想として掲げられた「幸福」「健全」な「家庭」は、法的な弱さを裏切った〈強い妻〉〈強い女〉によって、〈闘いの場〉になったのである。

『道草』『半日』は、このような意味で、新しい妻の側面を描いた、新しい小説と言えるだろう。